

翻訳：

スフラワルディー著『照明哲学』（*Hikmat al-Ishrāq*）

第一部第二巻（第一軌範から第六軌範）翻訳・訳注

Translation of the Book II in the Part I (from “the First Rule” to “the Sixth Rule”)
in *Hikmat al-Ishrāq* of al-Suhrawardī

宮島 舜

Shun MIYAJIMA

I. 緒言

本稿は先号に寄せた訳稿（宮島 2019）にひきつづくシハーブッディーン・ヤフヤー・イブン・ハバシュ・スフラワルディー *Shihāb al-Dīn Yahyā ibn Ḥabash al-Suhrawardī*（1191 年歿）の主著『照明哲学』の部分訳である。先号では同書の序文および第一部第一巻を訳載したが、今号では第一部第二巻の前半部分（「第一軌範」から「第六軌範」まで）を翻訳の対象とする。

同個所では命題と推論とが主として論ぜられる。まず第一軌範で基本的な命題の形態が紹介され、定言命題と条件命題とが説明される。それ以降命題についてさらに細叙されてゆく。第二軌範でスフラワルディーは限量の局面を導入する。つづく第三軌範では様相が論ぜられるが、この軌範の末尾には「照明哲学」と題した論述が付され、そこでは著者が様相論理学の新たな定式化を示す。第四軌範と第五軌範ではそれぞれ矛盾と换位について説かれる。第六軌範からは推論へと主題が転じてゆく。

如上の論件を対象とする本訳稿は、『照明哲学』中でスフラワルディーが、逍遙学派の思考や措辞ともっとも接近する個所のひとつである。じっさい適宜訳註で示すように、逍遙学派の著作のうちにスフラワルディーの命題論と併行的な記述をわれわれがたやすく見出すことができる。事實は、先号に訳載したかれの逍遙学派式定義論への正面からの批判とは少なからず趣を異にする。スフラワルディーの論理学説は、形式的にも、逍遙学派に多くを負うものの、却ってそれゆえに、論理学の議論においてこそ、かれと同派との思考のずれが泛びあがる、両者の相異が分明となるともいえるかもしれない。本訳稿で扱われる論件にかぎっていえば、殊に様相論理学をめぐるスフラワルディーの所説がもっともけざやかにその独創を示すテキストであり、逍遙学派の考想からかれのそれが背馳するモメントがあらわになる局面である⁽¹⁾。書の構成上からかれ

⁽¹⁾ 但しスフラワルディーの様相論をその「創見」と看做しうるかいなかについては諸家により見解が分れてはいる。その次第は訳註でのちに関説する。

そのひともまたそのことを期していた次第をうかがわせる。

先号と同様に Henry Corbin, Walbridge & Ziai, Muḥammad Malikī のそれぞれ手になる3つの校訂⁽²⁾を底本として採用したが、ときに註釈者クトゥブッディーン・シーラーズィー Qutb al-Dīn Shīrāzī (1311年歿) の引く原文を参照しました。各版の表記の異同が問題となるさいにはその旨を註記した。自余の訳出上の諸原則は先号のそれを踏襲することとする。

II. 翻訳・訳註

第二卷

種々の証明とその諸原理について
複数の軌範からなる

第一軌範

「命題と推論との定義⁽³⁾について」

(16) 命題とは、その言明をなす者にたいして「真を述べている」または「偽を述べている」と言われうる言明のことである。また推論とは、それが承認されたさいには自体的にそこから別の言明が導出される諸命題から構成される言明のことである。命題のうちでもっとも単純なものは定言命題⁽⁴⁾であるが、定言命題とは〔命題中の〕ふたつのものの一方が他方であるかいなかを判断する命題のことである。たとえば「人間は動物である」または「でない」とわれわれが言明するごとくである。ところで、それについて判断されるもの (maḥkūm ‘alay-hi) は主辞 (mawḍū‘) と呼ばれ、それであると判断されるもの (maḥkūm bi-hi) は賓辞 (maḥmūl) と呼ばれる。ふたつの命題のうちのそれぞれが一箇の命題たることをやめ両者が繋がることで、ふたつの命題からひとつの命題がつくられよう。そこでもしそれが含意による繋がりであるならば、その命題は

⁽²⁾ 本稿では Corbin 版, WZ 版, Malikī 版と各版を呼称する。

⁽³⁾ 「定義」と訳した原語は rasm である。同語は hadd との概念対を意識するならばそれとの区別を明確にするために「記述定義」等と訳されるべきであるがここではそれほど区別をつよく打ち出す必要はないため不要な混乱を回避すべくたんに「定義」とだけ訳した。但しスフラワルディーが hadd と rasm との概念対を踏まえただけでこれらの語を用いているというのはかれ自身の記述から確認できる (Corbin 版 19; ZW 版 9; Malikī 版 308; 宮島 2019: 78)。

⁽⁴⁾ 原語は ḥamlīya。原語にそくすなら「述定命題」といったふうにも訳出されうるがこの語については意味を優先し「定言命題」と訳出することとした (他の用語については比較的原語のニュアンスを反映する訳語とした)。なおこれ以後原文上ではこのように「命題 (qaḍīya)」という語を省略した表記が幾度も登場するが、訳文上では邦語としての読みよさをも勘案して、「命題」の語をそのつど断りなく補うこととする。

「接合的条件命題」⁽⁵⁾と呼ばれる。かれら⁽⁶⁾の「太陽が昇っているなら昼である」⁽⁷⁾という言明がたとえばそうである。そのふたつの部分のうち、条件詞につくものは前件 (muqaddam), 応答詞につくものは後件 (tālī) と呼ばれる。それらから推論をつくりたいと思えば、前件そのものを抜きだした定言命題をそれ（先の条件命題）に接続して、後件そのものが導出されるようにすればよいのである。たとえば「しかるに太陽が昇っている、ゆえに昼であることが導出される」というわれわれの言明がそうである⁽⁸⁾。あるいはまた、後件の対立 (naqīd) を抜きだして前件の対立を導出するのもよい。たとえば「しかるに昼ではない、ゆえに太陽は昇っていない」というわれわれの言明がそうである⁽⁹⁾。それというのも導出するものが存在するときには必然的に導出されるものも既に存在しており、いっぽう導出されるものが分離されるときには導出されるものも既に分離されているからである。[推論をつくるのに] 前件の対立が抜きだされることもなければ後件そのものが抜きだされることもない⁽¹⁰⁾。後件は前件よりも一般的だろうからである。たとえば「もしこれが黒であればそれは色である」とわれわれは言明するだろう。より特殊なものが分離されたりそれが偽であったりすることからより一般的なものが分離されたり偽であったりすることが導出されはせず、他面でまたより一般的なものが定立されたりそれが真であるからといってそのことからより特殊なもの定立や真たることは導出されないのであって、却ってより特殊なものが定立されたりそれが真であることからこそより一般的なものの定立とその真たることが導出されるのであり、より一般的なものが分離されたりそれが偽であることからより特殊なもの分離やその偽たるものが導出されるのである。もし相反的 (bi-'inād) にふたつの定言命題を繋ぐのであれば、その命題は「離接的条件命題」⁽¹¹⁾と呼ばれる。たとえば「この数は偶であるかまたは奇であるかである」というわれわれの言明のようなものである。この命題の部分⁽¹²⁾はふたつより多くともよい。それらの部分を結合することは可能でないが他方でそれらの部分 [のいずれも] を欠くことも可能でないというのがほんとうである⁽¹³⁾。もしそれらから推論をつくりたいと思えば、それらのうちから同意せられたものそのものを抜きだして、ひとつであれ多数であれ、残ったものの対立を導出するか、もしくは、同意せられたものの否定を抜きだして残ったものそのものが導出されるようにすればよい。もし [或る離接的条件命題が] 多数の部分をもっており、[そのうちの] ひとつの否定が抜きだされるとすれば、残ったもののなかにも依然として離接的 [条件命題] が残存している⁽¹⁴⁾。接合的 [条件命題] はふたつの

⁽⁵⁾ 原語は *shartīya muttaṣila* である。意味上は「仮言命題」と考えてよい。

⁽⁶⁾ この以前（第一巻）の記述から「逍遙学派」のことを述べていると考えられる。

⁽⁷⁾ 後件の原文は *fa-al-nihār mawjūd* であるので、「昼 [という状態] が存在する」「昼がある」とも訳される。

⁽⁸⁾ *Modus ponens* がここで言われている。

⁽⁹⁾ *Modus tollens* がここで言われている。

⁽¹⁰⁾ 前件否定の誤謬と後件肯定の誤謬とがここで言われている。

⁽¹¹⁾ 原語は *shartīya munfaṣila*。意味上は「離接命題」と考えてよい（註 13 併照）。

⁽¹²⁾ すなわち離接的条件命題を構成する離接肢。

⁽¹³⁾ すなわちここで言われる離接的条件命題は不両立な相反的選言、強い選言を構成する。

⁽¹⁴⁾ たとえば、 $(P \vee Q \vee R \vee S) \wedge \neg P \rightarrow (Q \vee R \vee S)$ 。

接合的〔条件命題〕から構成されることもあろう。たとえば「もし太陽が昇っているあいだは昼であるならば、太陽が沈んでいるあいだは夜である」とかれらが言明するごとくである。この二者から⁽¹⁵⁾は離接的〔条件命題〕も構成されよう。たとえば「太陽が昇っているときに昼であるかまたは太陽が沈んでいるときに夜である」とわれわれが言明するごとくであり、形式は〔他にも〕多数ある。天稟をもつ者であれば〔上来の〕法則を知ったあとではかようにして〔諸命題を〕構成することはむつかしいことではあるまい。知りおきなさい、含意や相反を明示することで条件命題は定言命題へと変転されうる。したがって「日昇は昼であることを含意する」または「夜であることと相反する」とわれわれは言明するのであり、条件命題は定言命題から転じたものなのである⁽¹⁶⁾。

第二軌範

「命題の分類について」⁽¹⁷⁾

(17) 条件命題において「もし……ならば……」や「……かまたは……」と言明されるばあい、つねにそうであるのか或るときにそうであるかでありうるため、〔当の命題は〕特定されるのでなければ錯誤をまねく不定量 (muhmal) となる。いっぽう定言命題においては、「人間は動物である」と言明されるばあい、人間のおのおのがそうであるのか、その部分的な或る者がそうであるのかが特定されることになる。というのは、人間性はそれ自体では網羅 (istighrāq) を必要とせず——なぜならかりに必要だとすればひとりの個人は人間でないことになってしまうから——他方でまた特殊化 (takhṣiṣ) をも必要としない、その両方に妥当するものだからである。したがって当の判断が網羅的なのか非網羅的なのかを特定し⁽¹⁸⁾錯誤をまねく不定量とならないようにせねばならない。ところでその主辞が個物的 (shākhīṣ) である命題をわれわれは単称 (shākhīṣa) 命題と呼ぶ。たとえば「ザイドは書くものである」といったきみの言明がそうである。その主辞が包括的であり当の判断がそれぞれすべてにたいして当てはまる命題は、たとえば、「あらゆる人間は動物である」や、否定のばあいの「いかなる人間も石でない」といったわれわれの言明がそうである。あらゆる命題に肯定と否定すなわち認めることと否むこと⁽¹⁹⁾の別がある。「或る (ba‘d) 」⁽²⁰⁾に特有である命題は、たとえば「或る動物は人間である」または「でない」といった

⁽¹⁵⁾ Corbin 版と Maliki 版では minhumā の訳出。WZ 版では minhā である。WZ 版では直前の命題全体を hā で承けていると考えられる。

⁽¹⁶⁾ Corbin 版では fa-kāna al-shartiyāt muḥarrifa ‘an al-ḥamlīyāt, WZ 版では fa-kānat al-shartiyāt muḥarrifa ‘an al-ḥamlīyāt, Maliki 版では fa-ka-anna al-shartiyāt muḥarrifa ‘an al-ḥamlīyāt とそれぞれ校訂されているが、ここでは WZ 版を採った。

⁽¹⁷⁾ Corbin 版と WZ 版とが示す表記 fi aqsām al-qaḍāyā を訳出した。Maliki 版では「諸推論とその不定性と肯定と否定の分類 (fi ḥaṣr al-qaḍāyā wa-ihmāliḥā wa-tjābihā wa-salbiḥā)」。

⁽¹⁸⁾ Corbin 版と Maliki 版では fa-l-yu‘ayyan だが WZ 版では fa-l-‘ayyana とある。

⁽¹⁹⁾ Maliki 版にはこの換言はない。

⁽²⁰⁾ 特称的なもの。

われわれの言明がそうである。不定量性を解消する語は「量化子」⁽²¹⁾と呼ばれる。たとえば「あらゆる」や「或る」等々がそれである。量化された命題は定量 (*maḥṣūrah*) 命題である。全称的で包括的な命題をわれわれは包囲命題⁽²²⁾と呼び、判断が「或る」に当てはまる命題を不定量特称 (*muhmala ba'ḍiya*) 命題と呼ぶ。

不定量特称条件命題では「もし……ならば……」または「……かまたは……」というふうにならわれは言明する⁽²³⁾が、「或る」はそのさいにもやはり不定量なのである。ものの「或る」[というありよう]は多数だからである。そこで命題におけるこうした「或る」に固有名を⁽²⁴⁾あたえよ⁽²⁵⁾。たとえば J としよう。すると「あらゆる J はかくかくである」と言明されるが、これで命題は包囲的となり錯誤をまねく不定量は消えさる。換位 (*'aks*) と対立 (*naqīd*) の或る場面においてしか特称命題は利用しえない。たとえば「もしザイドが海にあるならかれは溺れていることであろう」と言明されるような条件命題についてもこれと同様であり、その状況を特定し網羅的とせよ。すると「ザイドが海にあり舟も泳ぐ術ももたないときにはつねにかれは溺れている」と言明されることになるのである。「或る」の本性が不定量的であることは否定されえないのである。きみが学知 (*ulūm*) を吟味するとき、そのうちに、「或るもの」の状況が不定量なままで索められるような探求対象をきみが見出すことは、その「或る」が特定されるのでないかぎり、ないのである。かくてわれわれが述べたことにそくして処されれば包囲命題だけが残るだろう。というのも学知においては諸個物の状況が索められることはないからである。またそうすれば、命題の規則はより少なく、精確で簡明なものとなるのである。

(18) 知りおきなさい、主辞と賓辞とがあり、両者の関係には真を置くことと否定することとがあるというのが定言命題のほんとうである。命題が一箇の命題であるのはこの関係によってなのである。この関係を示す語は繫辞 (*rābita*) と呼ばれるが、或る言語ではこれが省略されることもあれば、その代りにその関係を思わせる性格をもつなんらかのものが導入されることもある。たとえば、アラビア語では、「ザイド [は] 書くもの [である] (*Zayd^{um} kātib^{um}*)」と言われるが、他方で、[繫辞に代るものが] 導入され「ザイドかれは書くものである (*Zayd^{um} huwa kātib^{um}*)」というふうにも言われるのである⁽²⁶⁾。否定命題は当の命題の否定辞が繫辞を断つ命題である。アラビア語では、命題を否定するためには否定辞は繫辞に先行しなければならない。たとえば「ザ

⁽²¹⁾ 原語 *sūr* には、哲学用語としては、*signum quantitatis*, *terme qui détermine la quantité*, *quantification sign* という意味がある (Afnān 1984: 131)。

⁽²²⁾ 原語は *al-qaḍīya al-muḥīta*。意味上は「全称命題」とも訳出されうる。

⁽²³⁾ Corbin 版と WZ 版とにある校訂 *naqūlu* を訳出した。Malikī 版は *taqūlu* と校訂している。

⁽²⁴⁾ Malikī 版では対格 *ism^{um} khāṣṣ^{um}* とされているのにたいし、Corbin 版と WZ 版とでは対格とされていない。

⁽²⁵⁾ Corbin 版と WZ 版では *fa-l-yaj'al* とあるが、Malikī 版では *fa-l-naj'al* とある。

⁽²⁶⁾ アラビア語には繫辞が存しないため名詞をつづけて記述したり代名詞をその代りとして用いたりすることでそれを文となす。直前のふたつの文ではその消息を判然と表示するため、かつまた、なによりもここでのスフラワルディー自身の論意に沿うために、訳文上では敢えて意味上は存しても統辞上は存しない繫辞的表現を補記のかたちとして示すこととした。

イドかれは書くものでない (Zaid^m laysa huwa kātib^m)⁽²⁷⁾というかれらの言明のごとくである。否定辞が繫辞とも結ばれ命題の二部分⁽²⁸⁾のうちのひとつになったとき、肯定的な繫辞はいぜん残るのである。アラビア語で「ザイドかれは書かざるものである (Zaid^m huwa lā-kātib^m)」と言明されるごとくである。というのも、繫辞はそのままだからである。そのさい否定辞は賓辞の一部となっているのである⁽²⁹⁾。[この種の] 肯定命題は「変形命題」⁽³⁰⁾と呼ばれる。

アラビア語以外では否定と肯定のさいに繫辞に先行するか後行するかは顧慮されることはなく、繫辞⁽³¹⁾がありつづけるかぎり否定辞が主辞の一部であれ賓辞の一部であれ、否定辞が命題を断つのでなければ、肯定命題である。「あらゆる偶数ならざるものは奇数である」ときみが言明するときそれは非偶数性によって属性づけられるものすべてからなる奇数性を肯定しているのだから命題は肯定なのである。

精神的な (dhihnī) 肯定判断は精神的に認めることをつうじてしか措定されない。いっぽう外的個物においてある (fi al-'ayn) という肯定判断は外的個物的に認めることをつうじてしかありえない。

くわえて条件命題は、そのなかの否定辞が複数化しても、含意的な繋がりや相反的な繋がりがある以上は、命題は肯定である。また否定が否定されるばあい、他の状況を考慮にいれないのであれば、それは肯定である。「あらゆる人間が書くものなのではない」というきみが言明するばあい、或る〔人間〕は書くものでありうるのであり、したがってその言明においては確証されるのはただ「或る」の否定 (特称否定) だけなのである。「いかなる人間も書くものではないわけではない」と言明されるばあいには、或る〔人間〕が書くものでないこともありうる。接合的条件命題の否定は含意を分離することにより、離接的条件命題の否定は相反を分離することによるのである。

第三軌範

「命題の様相 (jihāt) について」

(19) 定言命題の賓辞と主辞との関係は、存在が必至的 (darūrī) で、「必然的 (wājib)」⁽³²⁾と呼

⁽²⁷⁾ この例文およびそれを提出するスフラワルディーの意図を邦文で表現することは容易ではないため、この例文にかんしては前のように (前註を参照) 形式性を表現せずに訳出することにした。スフラワルディー自身の論意に沿えば、この例文では、否定辞が繫辞 (に代るもの) に先立っているということがその大体である。

⁽²⁸⁾ 主辞と賓辞のこと。

⁽²⁹⁾ WZ 版の示す原文 wa-qad yasīru al-salb juz' al-maḥmūl の訳出である。同版の yasīru は Corbin 版と Malikī 版では ṣayyara。

⁽³⁰⁾ 原語は ma'dūla。意味上は「無限命題」と訳すことも可能である。

⁽³¹⁾ Corbin 版と WZ 版では ribāt, Malikī 版では rabṭ と表記されている。「繫辞」の意味と解して訳出した。

⁽³²⁾ 「必至的 (darūrī)」と「必然的 (wājib)」との別には注意を要する。混同を避けるべく本訳稿では、

ばれるか、非在が必至的で、「不可能的 (mumtani'）」と呼ばれるか、存在と非在とが必至的でない、すなわち「可能的 (mumkin)」⁽³³⁾であるかのいずれかである。第一のものとしては、たとえば「人間は動物である」、第二のものとしては、たとえば「人間は石である」、第三のものとしては、たとえば「人間は書くものである」といったきみの言明がそれである。ただおそらく大衆のいう可能的とは不可能的でないものの謂いであろう。ためにかれらが「不可能的でない」と言明するばあい意図しているのは可能的ということであり、いっぽう「可能的でない」と言明するばあい不可能的のことをかれらは意図しているのである。これはけれどもわれわれの依って立つところではない。この観方に沿っていえば、可能的⁽³⁴⁾ならざるものとは存在が必至的もしくは非在が必至的なものとなるであろうからである。必然性⁽³⁵⁾や不可能性を他に依拠するものは、その他のものが取り除かれたときには、当の必然性も不可能性も残存しない、すなわちそれ自身では可能的⁽³⁶⁾なのである。可能的なものはその存在を必然化するものによって必然的でもあれば、その存在を必然化するものがないことを要件として不可能的でもある。その存在と非在という両情態においてもそのもの自体を単独で思念すればそれは可能的なのである。

(20) 知りおきなさい、われわれが「あらゆる J は B である」と言明するときその意味はただ「J」によって叙述せられるもののそれぞれ一々が「B」によって叙述せられるということにほかならない。なぜといえばきみが「あらゆる J は B である」というばあい、J の概念が一般的な意味であることが分るからである。したがって「それぞれ一々」と言明することできみは J のもとにある諸個体を相手にしているのである。それというのもその [J の] 意味は J 全体ではないからである。なんとなれば、「一々の人間を一軒の邸は収容しうる」ときみは言明することが可能であるが「人類全員を一軒の邸は収容しうる」とは言明しえないからである。たとえば「あらゆる眠るものは目醒めうる」といった命題をまえにしたとき、「あらゆる眠るもの」というわれわれの言明が要請しているのが眠っているかぎりでの眠るものではないことをきみは分っている。眠っているにも拘らず目醒めていると叙述されることは仮想しえないからである。そうではな

従来は同種の訳語があたえられることもあった (e.g. WZ 訳 17-18; Suhrawardī 2011: 30) この両語にたいして、こころみに別々の訳語をあてることとした。後者は、この文脈では、あくまで他の二者と区別される様相として用いられるが、前者はそうではなく、直後にあるように、様相としての「不可能的」と「可能的」を説明するさいの定義（「非在が必至的」「存在と非在とが必至的でない」）にも用いられる。なお *darūrī* は、のちに説かれるスフラワルディー独自の様相論における「必至確定命題」でも用いられる。註 38 および 40 をも併照のこと。

⁽³³⁾ スフラワルディーの採るアラビア哲学の様相論では可能的 (possible) と偶然的 (contingent) とが語のうえで区別されず、mumkin (可能的) と言われる。イブン・スィーナも命題の質料として挙げているのはこの 3 つである (*Ishārāt*, 261)。本稿では原文の表記にそくして邦語上でも一貫した訳語（「可能的」）をあたえることとしたが、mumkin の包摂する意味内容のかかる多重性には注意が必要である。

⁽³⁴⁾ 既述のとおり mumkin は偶然性を包含するため、いささか紛然としてみえもするが、以下の（俗説にたいする批正というかたちでなされる）行論における mumkin は wājib や mumtani' と区別される意での可能的であり、偶然的と訳出することもできる。

⁽³⁵⁾ Corbin 版と Maliki 版とが示す原語 wujūbuhu の訳出。WZ 版では wujūduhu (存在) である。

⁽³⁶⁾ すなわち偶然的。前註を参照。

くして眠るものと叙述された個人とは眠ることもできれば目醒めることできるものなのである。同様に「あらゆる父は子に先立つ」とわれわれが言明するばあい、[その父という名辞は] その者が父であるかぎりでの父という意味[で言明されている]ではなく父であると叙述される個人ということなのである。また、「あらゆる運動するものは必至的に転化するものである」⁽³⁷⁾と 言明するとき、きみが知りうるのは、運動するものと叙述されるもののそれぞれ一々は、かならずしも自体的に転化するわけではなくむしろそれが運動するものであるがゆえにそうなのだということである。その必至性は条件に依拠しており、それ自身では可能的である。われわれのいう必至的とはたんに自体的にあるものの謂いである⁽³⁸⁾。時間や状況といったなんらかの条件によって必然化するものはそれ自身では可能的なのである。

照明哲学

「あらゆる命題が必至肯定命題に帰趨することの証明について」⁽³⁹⁾

(21) 可能的なものの可能なることは必至的であり、不可能的なものの不可能なることも必至的であり、必然的なものの必然なることもまたそうであるのだから、必然およびそのふたつの同等物(可能と不可能)からなる様相を賓辞の部分とし、あらゆる状況で命題が必至的となるようにするのがいっとう好ましいのである。きみが次のように言明するごとくである。「あらゆる人間は必至的に書くものであることが可能的である、または、動物であることが必然的である、または、石であることが不可能的である」。これらは必至確定命題 (*darūra battāta*) である⁽⁴⁰⁾。われわ

⁽³⁷⁾ Cf. アリストテレス『自然学』第五卷第一章 224b35–225b3.

⁽³⁸⁾ スフラワルディーのこれまでの説述からすると、「必然的 (*wājib*)」とは、少なくとも様相論の文脈においては、可能的や不可能的との関係において言われる。たとえば優先因によって可能者が必然者となると言われるさいの必然である。そしてこれはまたスフラワルディーの行き方では賓辞の部分とせられる。それにたいして「必至的 (*darūrī*)」とは即自的な仕方であらう意味で言われる。必至性と必然性とは準位を異にし前者は後者に比していわばより基底的(ないしは高次的)であり、後者はなんらかの仕方であらうとともに即自的に可能的であるものとスフラワルディーは考えるようである。なお「必然」概念におけるかかるずれはイブン・スィナーにおいて既に認知されていたようではある (cf. *Ishārāt*, 260–261; 1984: 91, n. 4) が、これを(表現のレベルでも)明瞭に区別したうえで直後の「照明哲学」でなされるような定式化を行なったことにスフラワルディーの独創は見出しえ、くわえて、この所作はかれ自身の認識論的な動因が要請するものでもあるように思われる。註 40 をも参照。

⁽³⁹⁾ Corbin 版と Maliki 版の表記 *fī bayān radd al-qaḍāyā kullihā ilā al-mūjiba al-ḍarūrīya* を訳出した。WZ 版の記述にしたがえば「あらゆる命題が確定必至肯定命題に帰趨することの証明 (*fī bayān radd al-qaḍāyā kullihā ilā al-mūjiba al-ḍarūrīya al-battāta*)」となる。「確定必至肯定命題」にかんしては後述される。

⁽⁴⁰⁾ 論理学において逍遙学派との相異を示すスフラワルディーの創見のひとつと考えられている思想がここおよびこれ以後で語られるかれの様相論理学説である。この「確定必至」は、所述の三様相とともに「つねに」と「或るときに」という時の様相 (*temporal modality*) が組みあわさっていると考えられる cf. Suhrawardī 1999, 173, n. 20。スフラワルディーによって提示されるこの様相論をどう捉えるか——逍遙学派のそれとどのように異なるのかまたは異なるらないのか、スフラワルディーの哲学体系総体ないしかれの形而上学説とどのように関係するのかまたはしないのか——については評者により見解が分れる cf. Ziai 1990; Walbridge 2000; Street 2008。ただいずれにせよ様相論理がこれまでにない

れが学知にかんしてももの可能性や不可能性を探求するとき、それはわれわれの探求対象の一部なのである。必至的にそうであることを知るものについてしかわれわれには決定的かつ確定的な (jāziman battatan) 仕方で判断することはできない。呼吸のような、あらゆるものについて或るときにおのおのものに生ずる可能的なものであったとしてもわれわれは確定命題以外の命題を用いることはない。「あらゆる人間は必至的に或るときに呼吸するものである」と言われるのが正しいのである。人間が或るとき呼吸することが必至的なものであることはつねに人間に随伴することがらであるいっぽう、それとは別の或るときには呼吸せざるものであることが必至的であることもまたつねに人間に随伴する。これは書くこととは異なる。というのも書くことは可能性の必至性ではあるにしても或るときに生ずることが必至的ではないからである。命題が必至命題であるならわれわれには繫辞の様相のみで十分である。なぜなら賓辞に別の様相をもちこむことなく命題が確定的であると想定されるからである⁽⁴¹⁾。たとえば、「あらゆる人間は確定的に動物である」ときみが言明するごとくである。これとは別様に命題が確定的とされるばあいには賓辞に様相を挿し入れざるをえない⁽⁴²⁾。様相を処理したあとではわれわれは否定を扱わないでよい⁽⁴³⁾。なぜというに完全な否定は必至的なものであるため、不可能性をわれわれが述べたとおりにし可能性もまた同様にしたときには、既に肯定のもとに組み入れられているからである⁽⁴⁴⁾。

知りおきなさい、命題とはただに肯定という点でのみ命題なのではなくして、否定という点でもまたそうなのである。否定はまた、分離をもって表わされるにせよ否認をもってにせよ、知的判断 (ḥukm ‘aqlī) なのである。それというのも精神のうちでの判断⁽⁴⁵⁾は純粹な否認ではなく、それが否認という判断であるとしての措定だからである。ものが否認と措定とをともにまぬかれることはない。他方で知性 (‘aql) における否認と措定は、ともに精神的判断であり、その情態は別のものである。したがって思惟対象 (ma‘qūl) にたいしてなんらかの状況が判断されないばあいそれは否認されるものでも措定されるものでもない。但しそれ自身では否認するものか措定するものである。これについてはやがて補完的に述べよう。命題のなかで様相が特定されないならそれは様相不定命題⁽⁴⁶⁾でありそこでは誤謬が多発する。そのため、主辞の量における不定

仕方で論ぜられたという意味での、解釈と表現（定式化）のうえでの革新性は認められよう。訳者としてはスフラワルディー哲学体系総体におけるこの様相論理学の布置をも見定めたいと考えているが、それとは別に純粹に一箇の論理学説としてみるときには、Street の見解に準依しつつ、ここでのスフラワルディーの必然性と諸様相との整理をこんにちの論理学にそくして de dicto 様相と de re 様相として整理することも可能であると考えられる。

⁽⁴¹⁾ Maliki 版が示す原文、idh yufraḍu kawnuhā battātan dūna idkhāl jiha ukhrā fi al-maḥmūl の訳出。Corbin 版と WZ 版が示す原文は、aw ta‘arraḍa kawnuhā battātan dūna idkhāl jiha ukhrā fi al-maḥmūl である。

⁽⁴²⁾ 可能様相および不可能様相を伴う命題のこと。

⁽⁴³⁾ Corbin 版と Maliki 版が示す原文 wa-la-nā an lā nata‘arraḍa li-l-salb ba‘da ta‘arruḍinā li-l-jihāt を訳出した。WZ 版は wa-la-nā an nata‘arraḍa li-l-salb ba‘da an tu‘arruḍinā li-l-jihāt。

⁽⁴⁴⁾ 本節「照明哲学」の劈頭の議論が手短かに再言されている。

⁽⁴⁵⁾ Corbin 版と WZ 版の表記 ḥukm fi al-dhihn を訳出した。Maliki 版では ḥukm dhihnī。

⁽⁴⁶⁾ 原語は muḥmalat al-jihāt であり、これはイブン・スィーナーのいう一般的な絶対命題 (qaḍīya mutlaqa) に相当する。

量性が排斥されたように様相不定命題をも排斥せねばならない⁽⁴⁷⁾。

第四軌範「対立とその定義」

(22) 対立 (*tanāquḍ*) とはただ肯定と否定のみによって二命題があい異なることである。だからして両命題がともに真であったりともに偽であったりはしないことになる。主辞や賓辞、条件、関係、様相は、両命題にあって相異しないのでなければならない⁽⁴⁸⁾。包囲命題には条件をさらにつけくわえる必要はなくむしろみずからが肯定したのと同じことをわれわれは否定するのである。たとえば、「あらゆる何某 (*fulān*) は必至的に誰某 (*bahmān*) たることが可能的である」という確定命題である言明を例にとる。これの対立は、「あらゆる何某が誰某たることが可能的であるのは必至的ではない」である。これ以外のばあいでもこのようである⁽⁴⁹⁾。「……ない」の対立は「……ないということはない」であり、われわれはみずからが肯定したのと同じことをこの二命題で否定しているのである。けれども肯定における網羅の否定からは、「或る」の否定の確証性ととも「或る」の肯定の許容も導出される⁽⁵⁰⁾。他方で否定における網羅の否定からは、「或る」の肯定の確証性と「或る」の否定の許容とが導出される。また「或る」に特有の命題は「或る」から対立をかたちづくることはできない。たとえば、「或る動物は人間である」と「或る動物は人間ではない」というきみの言明のごとくである。これは〔対立として〕適当ではない。なぜというに「或る」とは不定量概念だからである。そのため〔前の両命題における〕人間である或るものが人間でない或るものではないことがありうるのである。この両命題の主辞は同一ではなかったわけである⁽⁵¹⁾。しかしながらその「或る」をわれわれが特定し一個の名辞のもとにまとめるならば——網羅的とするというわれわれが既に述べた仕方——所述のとおりになる⁽⁵²⁾。だがおそらく逍遙学派にふかいる必要はなかろう。上のことをきみが覚えているならかれらの説を娓娓論ずる要はあるまい。

第五軌範 換位について

⁽⁴⁷⁾ Corbin 版と Maliki 版の示す原文, *fa-l-yuḥdhaf* の訳出。WZ 版は *fa-l-tuḥdhaf*。

⁽⁴⁸⁾ 矛盾命題を形成するふたつの命題のあいだで一致する質を除く要素としてスフラワルディーは 4 つの具体例を挙げているが、この議論の逍遙学派における対応個所ではさらに多くの要素が挙げられている。イブン・スィーナは、主辞と賓辞（およびそれに類するもの）、条件と関係、部分と全体、潜勢態と現勢態、時間と空間の 5 組を具体的に挙げている (*Ishārāt*, 301–302)。またガザリーは『哲学者の意図』において、主辞（の一意性）、賓辞（の一意性）、限量（特称と全称）、潜勢態と現勢態、関係、時間と空間を挙げている (*Maqāsid*, 27–28)。

⁽⁴⁹⁾ このような仕方では包囲命題の矛盾命題をつくることができるということ。

⁽⁵⁰⁾ A 命題の矛盾は E 命題とはならないということ。

⁽⁵¹⁾ たとえば前者の「或る動物」が人間であり後者が馬であるばあいを仮想せよ。

⁽⁵²⁾ 「或る」の否定が当のものの矛盾概念をかたちづくる。

(23) 换位とは質を維持したまま命題の主辞をすっかり賓辞とした賓辞を主辞とすることであるが、そのさい真偽は当の状態そのままである⁽⁵³⁾。「あらゆる人間は動物である」ときみが言明するとき、「かつ⁽⁵⁴⁾あらゆる動物は人間である」と言明することが不可能であることはきみも知っていようが、主辞が賓辞よりも特殊であるあらゆる命題はこれと同断なのである。とはいえ少なくとも次のことはいいうる。何某であると叙述されるとともに誰某であるとも叙述されるものがある——たとえば J とせよ。さて、何某に含まれるものが、全称であれ特称であれ、誰某であるばあい、かならず誰某であると叙述されるものは、全称であれ特称であれ、何某と叙述されることになる。すると J はその両方によって叙述されるのである。

「必至的にあらゆる人間は書くものであることが可能的である」とわれわれが言明するばあい、その换位は、「必至的に書くものであることが可能的であるものうちの或るものは人間である」となる。可能性以外の様相も同様に賓辞とともに移動する⁽⁵⁵⁾。必至確定肯定命題の换位はそれがいかなる様相であったかに拘らず必至確定肯定命題である。

包圍命題と特称命題は賓辞にぞくするものが主辞によって不定量的な仕方で叙述されることで换位されうる⁽⁵⁶⁾。「必至的にいかなる人間も石ではない」ならば「必至的にいかなる石も人間ではない」ことになる。とはいえもし叙述されるものうちに一方⁽⁵⁷⁾が他方によっても叙述されるものが存するならば、〔元の命題と换位された命題の〕⁽⁵⁸⁾一方の偽に限定されはせず、むしろ両方とも⁽⁵⁹⁾が偽なのである。

可能性が必至確定命題の賓辞の部分であり、その命題に否定辞も伴っているとすれば、否定辞もまた〔换位にさいして〕移る。たとえば、かれらの言明「必至的にあらゆる人間は書くものでないことが可能的である」は確定肯定命題であるが、これの换位は「必至的に書くものでないことが可能的であるものは人間である」となる。逍遙学派の多くはこのことについて誤っている⁽⁶⁰⁾。「或る動物は人間ではない」というふうなきみの言明において、その「或る」を特定しそれを全称量化するとき、われわれが言明したものへと换位される⁽⁶¹⁾。いっぽう否定辞を賓辞の部分とし「或る動物は人間ならざるものである」ときみが言明するならば、それは「或る人間ならざるも

(53) 逍遙学派の换位の規定をそのまま襲用した表記である。(Ibn Sīnā *Ishārāt*, 321; Ghazālī *Maqāsid*, 64)

(54) Corbin 版と WZ 版にある wa が Maliki 版にはない。前者を採用した。

(55) 限量换位となるがそのさい必至確定肯定命題をかたちづくる必至性でない賓辞につく諸様相もまた换位に伴う賓辞の移動に従うの意。

(56) シーラーズィーは特称命題への换位であると換言している (QDS 1. 173)。

(57) ここでの例にしたがえば、人間と石のいずれかということ (QDS 1. 174)。

(58) シーラーズィーの註釈に依拠して補った (QDS 1. 173–174)。

(59) Corbin 版および Maliki 版の校訂では kullāhumā, WZ 版の校訂では kullayhimā とある。

(60) WZ 版と Maliki 版では yakhbiṭu と校訂されているが、Corbin 版では最初の（前二校訂における yā' にあたる）文字が指定されていない（少なくとも判読しえない）。なおシーラーズィーの註釈中の引用では同語は takhabbata とされている。

(61) シーラーズィーが挙げている例にそくしていえば、「或る動物は人間ではない」の「或る動物」を馬と特定化し「いかなる馬も人間ではない」と全称量化するならば、「いかなる人間も馬ではない」と换位されることになる (QDS 1. 175)。

のは動物である」と换位され、そうでない仕方では换位されえない。「いかなる王位も王のうえにない」というきみの言明が完全な〔賓辞の〕⁽⁶²⁾移動を伴わずに换位されよう筈はない⁽⁶³⁾。きみはそれゆえ「いかなる王も王位のうえにない」とは言明しえず、むしろ「いかなる王のうえにあるものも王位ではない」と言明するのであるから、「うえに (‘alā)」という語の移動も避けられない。なぜというにここでは⁽⁶⁴⁾〔「うえに」という〕その語が賓辞の一部分だからである。换位と矛盾と否定と特称不定量命題を引きあいにはただ注意喚起のためなのであって、〔本書において〕以後に述べることにそれが必要だからではない。

第六軌範 推論にかんすることについて

(24) 推論は少なくともふたつの命題よりなる。ひとつの命題がすべての結論を含んでいるならば、その命題は条件命題であり他の命題はかならず定立されるか分離される。すなわちこれは除外推論⁽⁶⁵⁾である。もしひとつの命題が結論の一部と対応するならばかならず〔結論の〕別の部分と対応するものがなければならず、したがって〔それと対応する〕別の命題があることになる。このばあいの推論は接続的 (iqtirānīyan) と呼ばれる⁽⁶⁶⁾。ひとつの推論が二より多くの命題からなることはない。というのは、結論にはふたつの部分しかないからである。二命題のうちの各要素が〔結論の〕部分と一致するならば第三のものが組み入れられるのは不可能であろう。条件命題にかんしていえば、複数の除外をつうじて残るのはひとつの除外だけであるが、しかし単一の推論中の前提が多くの推論に基づくことはありうる⁽⁶⁷⁾。なお命題が推論の部分となると前提

(62) シーラーズィーの註釈にそくして補った (QDS 1. 176)。

(63) 以下の例によって示されるように部分的な移項によっては换位は成立せず、賓辞につくすべてのものが完全に (bi-al-kullīya) 主辞とならねば换位とはならない。

(64) Corbin 版およびシーラーズィーが引く原文では hayhunā, 他方 WZ 版と Malikī 版では hāhunā。

(65) 原語は qiyās istithnā’ī。「除外推論」は前提に結論となる命題 (またはその矛盾命題) が含まれている推論であり、形式的には前陳の二種の条件的命題からなる推論がこれにあたる。なお qiyās istithnā’ī は直後に述べられる iqtirānī とともに逍遙学派の用いる論理学術語である (Ibn Sīnā *Ishārāt*, 374–376; Ghazālī *Maqāsid*, 67–87) が、この istithnā’ī にいかなる訳語をあたえるかは議論が分れる (同語の訳語をめぐる問題については Ibn Sīnā 1984: 131–132, n. 15 における Inati の記述を参照)。本稿では Sīnāi による同語の解釈 (Sīnāi 2011: 320) を参考にしたうえで、訳語に原語の語義を響かせ、「除外 (的)」と訳出することとしたが、「反復推論」という訳語があたえられることもある cf. Ibn Sīnā 1984: 131。

(66) 如上の「除外推論」とは異なり「接続推論」は結論が前提のうちに不明瞭な仕方を含まれ中項をつうじて結論がみちびかれる推論であり、形式上は、前提となる命題が条件的である「除外推論」にたいして定言的となることになる。

(67) WZ 版と Malikī 版では yajūzu an takūna qiyāsāt kathīra mubayyana li-muqaddimatay qiyās wāhid と校訂され Corbin 版では takūna が yakūna とあるがそれ以外は変りない。他方シーラーズィーが引く原文では 3 校訂の mubayyana は muthbita とある (QDS 1. 181)。また Malikī は mabnīya という表記のヴァリエントを報告している (Malikī 版 366)。本稿の訳出では mabnīya を採った。なお WZ は校訂のうえでは上記のとおりだが、対応個所の翻訳では mubayyana ではなく muthbita (ないしは mabnīya) を想わせる訳語をあたえている (WZ 訳 21) が、ヴァリエント等についてはなんらの註釈もされていない。Sīnāi もおそらく mabnīya の意と解している (少なくとも mubayyana を訳出してはいない) ようにみ

(muqaddima) と呼ばれる。接続的な二前提はかならず中項 (ḥadd awṣat) と呼ばれるものを共有する。前提の主辞と賓辞のそれぞれが項辞 (ḥadd) と呼ばれる。〔中項は〕 両前提のうちの一方向の賓辞と他方の主辞のうちに、あるいはその両方の主辞または両方の賓辞のうちにならず発生するが、その両項辞の中項ではないほうは端項 (ṭaraf) と呼ばれる。結論は両端項より生じ中項は省かれる。繰り返えされる項辞、つまりは中項が第一前提の主辞であり第二前提の賓辞であるばあい⁽⁶⁸⁾、それは、その推論的妥当性をおのれ自身によっては〔ただちには〕 領略しえずしたがって省かれうる最終格である⁽⁶⁹⁾。接続推論でもっとも完全であるのは中項が第一前提の賓辞と第二前提の主辞であるものであり、これがもっとも完全な格である。

参考文献（略号を用いたものは末尾に □ でくくってそれを示した）

- Afnān, S.M. 1984: *Wāzhahnāmah-i falsafī-i, Fārsī, ‘Arabī, Ingīlīsī, Farānsah, Pahlawī, Yūnānī, Lātīn*, 2nd ed. Tih-rān: Intishārāt-i ḥikmat.
- Ibn Sīnā, 1968: *Ishārāt wa-al-tanbīhāt*, ed. by Slaymān Dunyā, vol. 1, al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif. [Ishārāt]
—, 1984: *Remarks and admonitions*, trans. by Shams Constantine Inati, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Inati, S.C. 1984: “Introduction,” *Remarks and admonitions*, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1–43.
- Ghazālī, Abū Ḥāmid al-, 1961: *Maqāṣid al-falāsifa*, ed. by Sulaymān Dunyā, al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif bi-Miṣr. [Maqāṣid]
- Shīrāzī, Quṭb al-Dīn al-, 2010: *Sharḥ-i Ḥikmat al-ishrāq: bih-inḍimām-i ta’līqāt-i Ṣadr al-Muta’allihīn*, ed. by Sayīd Muḥammad Mūsawī, 2 vols., Tih-rān: Intishārāt-i Ḥikmat, bā hamkārī wa ḥimāyat-i Wizārat-i Farhang wa Irshād-i Islāmī. [QDS]
- Sinai, N. 2011: “Kommentar,” *Philosophie der Erleuchtung: Ḥikmat al-ishrāq*, trans. by Nicolai Sinai, Berlin: Verlag der Weltreligionen, 223–432.
- Street, T. 2008: “Suhrawardī on Modal Syllogisms,” *Islamic Thought in the Middle Ages*, ed. by Anna Akasoy & Wim Raven, Leiden: Brill, 163–175.
- Suhrawardī, Shihāb al-Dīn Yahyā al-, 1976–77: *Majmū‘ah-i muṣannaḥāt-i shaykh-i Ishrāq; Œuvres Philosophiques et Mystiques*, 3 vols., ed. by Henry Corbin, Paris: Dépositaire Librairie Adrian Maisonneuve.
- , 1999: *Philosophy of illumination*, eds. and trans. by John Walbridge & Hossein Ziai, Provo: Brigham Young University Press.

える (2011: 34) がそのことについてとくだん註記などはしていない。

⁽⁶⁸⁾ 第一前提、第二前提がそれぞれ「大前提」「小前提」でないことに注意されたい。

⁽⁶⁹⁾ ガレノス（第四）格のこと。

- , 2011: *Philosophie der Erleuchtung: Ḥikmat al-ishrāq*, trans. by Nicolai Sinai, Berlin: Verlag der Weltreligionen.
- , 2014 or 2015: *Kitāb ḥikmat al-ishrāq*, ed. by Jalāl al-Dīn Muḥammad Malikī, 2 vols., Tih-rān: Pazhūhishgāh-i ‘Ulūm-i Insānī wa-Muṭālī‘āt Farhangī.
- Walbridge, J. 2000: *The Leaven of the Ancients: Suhrawardī and the Heritage of the Greeks*, Albany: State University of New York Press.
- Ziai, H. 1990: *Knowledge and Illumination: a Study of Suhrawardī’s Ḥikmat al-Ishrāq*, Atlanta: Scholars Press.
- 宮島舜 2019 : 「スフラワルディー著『照明哲学』 翻訳・訳註 : 序文および第一部第一巻」『イスラム思想研究』 1, 65–82.

*本研究は JSPS 科研費 JP19J20770 による研究成果の一部である。

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員 DC

Ph. D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science